

生成AIの将来技術動向 2026年

——AIエージェントが拡張する個の圧倒的な生産性と、
次世代組織に向けた「オーグメンテッド・エンタープライズ」への転換

目次

はじめに

#1 LLMによる人の能力の拡張性

#2 AIエージェントを活用した個人による飛躍的生産性向上の時代へ

#3 個人能力の最大化による次世代組織への転換・再設計

はじめに——本レポートを執筆した背景

- 生成AIの導入と技術の進展が加速しており、多くの企業で生成AIの活用が拡大しています。これに伴い、最新のモデルが次々と開発され、業務の革新が進んでいます。
- 個人の生産性は飛躍的に向上し、執筆、ソフトウェア開発、プロジェクト管理、研究など多様な分野で仕事のあり方が変化しています。その結果、一人で従来は何倍もの成果を達成できるようになっています。
- 本レポートでは、直近1年の技術的な進展を整理し、AI技術の発展に伴う個人の生産性向上と、それに伴う組織の変革について考察します。

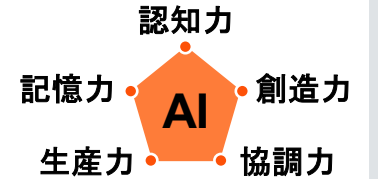
エグゼクティブサマリー

#1

AIエージェントによる能力の拡張

自律化を支える5つの能力のアップデート

AIは人間同等以上の汎用知能レベルに向けて、5つの能力(認知力・記憶力・創造力・生産力・協調力)の拡張を基盤に、人間の介在が不必要になり、自律性を高めつつある



#2

個人の生産性の増幅と役割の変容

AIエージェントは人の思考と実行の制約を解放し、個人の扱える業務量と成果の質を3倍以上に跳ね上げる

“脳”の外部拡張

人間では網羅しきれない数百のシナリオ検証の並列実行を通して、最適解への到達を加速

“手”の外部拡張

デジタル空間での数十ツールによる並列実行や、フィジカル空間で非精密な作業を実現

人は品質担保と最終意思決定を担う立場となり、AIエージェントを束ねて複数専門領域を横断的に統制

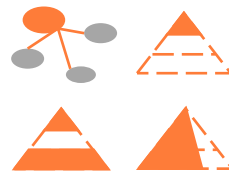
#3

次世代組織への転換

企業はAI前提で付加価値創出を最適化する次世代組織への再構築を迫られている

シンギュラリティ・エンタープライズ組織への移行段階として、階層の縮小、部門境界の流動化、中間管理機能の再定義が進む方向へ再編されていく

組織ピラミッド構造変容



日本企業に備わる構造的優位性を活かして、AI前提で組織運営を再設計することが求められる

AI前提の組織変革の好機
労働者不足を背景とする導入インセンティブ

高水準で均質な人材基盤

品質追求の高価値

目次

はじめに

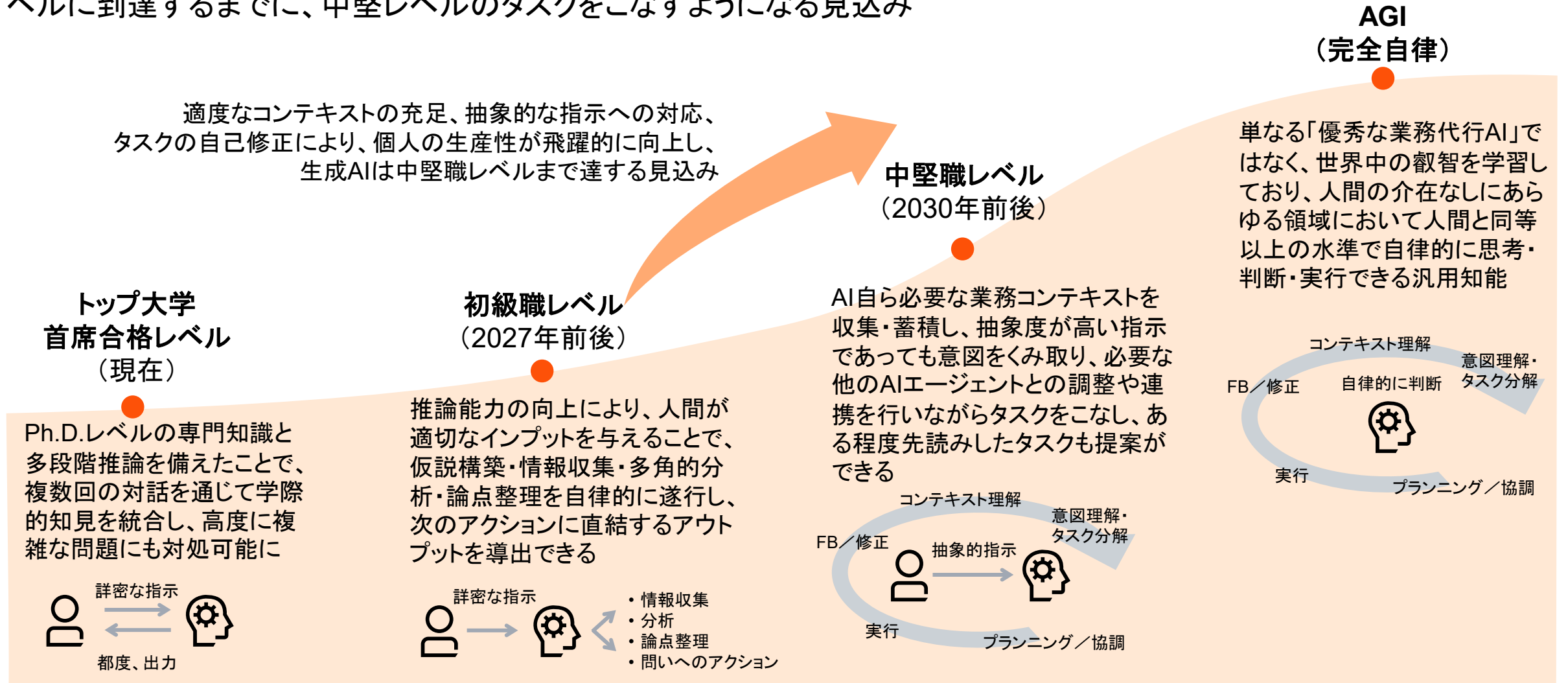
#1 LLMによる人の能力の拡張性

#2 AI エージェントを活用した個人による飛躍的生産性向上の時代へ

#3 個人能力の最大化による次世代組織への転換・再設計

生成AI・AIエージェントの業務的役割の進化

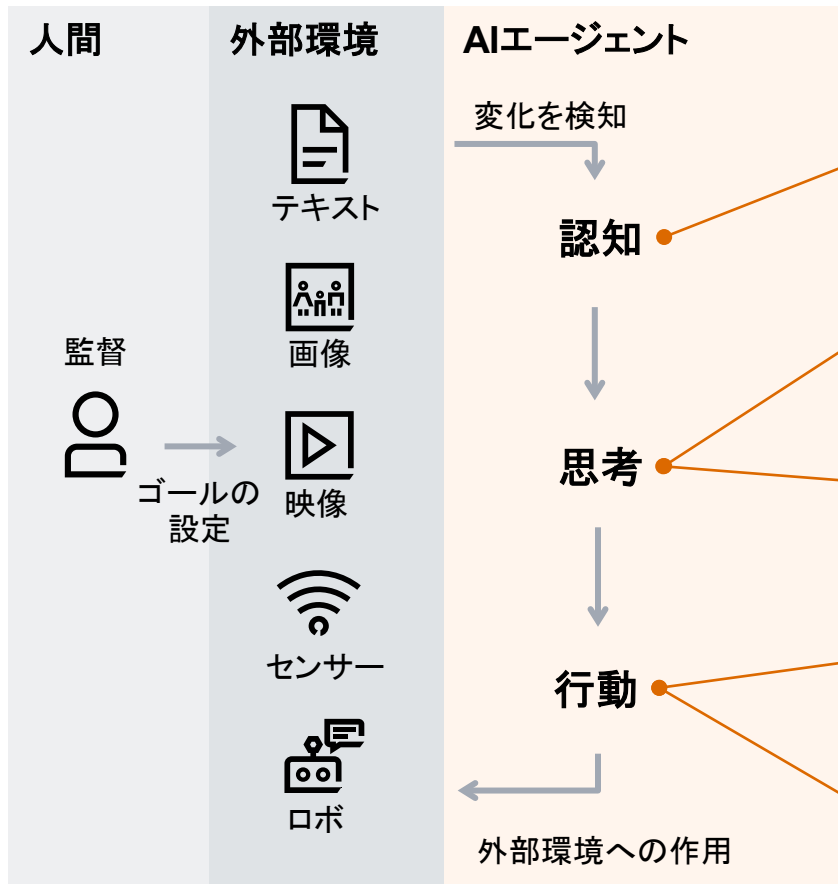
現在、ベースモデルは一部の初級職(若手)が担うタスクまでこなすようになってきた。今後は人工汎用知能(AGI)のレベルに到達するまでに、中堅レベルのタスクをこなすようになる見込み



生成AI・AIエージェントの自律化を支える5つの能力の発展

AIエージェントの自律性を支える「5つの能力」の急伸により、外部環境との動的なやり取りを自ら実行できるフェーズへと移行しつつある

AIエージェントの自律的なタスク遂行



自律に必要な能力と各能力の急伸

能力	能力の概要	急伸の概要
認知力	扱えることができるデータの質や量に関する能力	<ul style="list-style-type: none"> A4のpdf資料600頁分※1(1Mトークン)にコンテキストウィンドウが拡大
記憶力	過去の履歴や長期的なコンテキストを踏まえて答える能力	<ul style="list-style-type: none"> 主要LLMサービスの大半でメモリ機能を搭載。過去の会話内容を記憶し、ユーザーの好みや背景を踏まえて応答可能に
創造力	未知の状況に対する解決策を生成する能力	<ul style="list-style-type: none"> 長年見過ごされていたソフトウェアの深刻な脆弱性の発見・再現 数学の未解決問題解決事例の報告
生産力	デジタルおよびリアルな外部環境に介入してタスクを遂行する能力	<ul style="list-style-type: none"> GitHubバグ修正の自律解決率※2 2024年約33% → 2026年約80~90% IoT端末(スマート家電等)へのAIエージェントによる自律的介入
協調力	他のAIや人間と連携し、単体では解決できない複雑な目標を達成する能力	<ul style="list-style-type: none"> AIエージェント間の通信標準(MCP・A2A)が2025年に策定され、異なるベンダーのAIが連携できるインフラが初めて確立

※1 1トークンあたり0.6文字、1頁あたり1000文字で概算 ※2 SWE-bench Verified

AIエージェントの今後(2035年)の技術進化

2035年、AIエージェントはAGIに向けて進化すると予想。デジタル世界での知的労働のみならず、現実世界における作業についても、人間と同水準のパフォーマンスを発揮できる見込みである

Agentの能力	現在の能力	2035年の達成水準(予想)
認知力 (扱うデータの質と量)	<ul style="list-style-type: none">1Mトークンのコンテキストウィンドウマルチモーダル(画像、音声など)認識	<ul style="list-style-type: none">限られたコンテキスト情報からの意図の正確な推察世界モデルなどの発展による物理空間・因果関係のシミュレーションが可能
記憶力 (過去の情報の蓄積)	<ul style="list-style-type: none">コンテキストの外部メモリ化(長期記憶化)コンテキストの適応的な圧縮	<ul style="list-style-type: none">ユーザーがもつ全てのコンテキスト(テキストに加え、視覚・聴覚・触覚など全てのモダリティ含む)の蓄積
創造力 (未知状況下での課題解決)	<ul style="list-style-type: none">一部の未解決問題の自律的な探索・解決(数学、セキュリティ分野など)	<ul style="list-style-type: none">実世界／科学技術分野での課題解決能力獲得(研究の自動化や自律的な科学的発見)
生産力 (外部環境への介入)	<ul style="list-style-type: none">ソフトウェア、ドキュメント(レポート・スライド)の設計・開発画像・動画・音楽等のクリエイティブの生成	<ul style="list-style-type: none">マルチモーダルAI・Physical AIを活用した、現実世界における定型的・非精密な製造活動の代替・補完
協調力 (他AIや人間との協調)	<ul style="list-style-type: none">A2A等のプロトコルの進展やオーケストレーション技術の発展	<ul style="list-style-type: none">Agentが、自律的に役割を見出せるようになることで、協調可能な数が増加しより難易度の高いタスクを遂行人間の役割はAgentへの伴走から監督へ変化

(補足1)認知力の進化

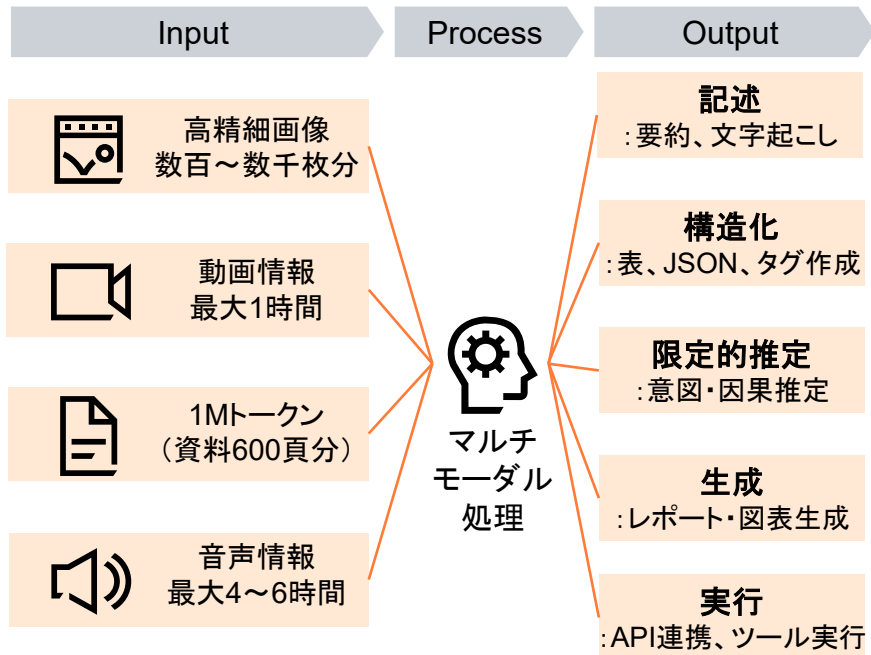
世界モデルや知識グラフの連携などの技術統合により、AIは大量の情報を整理する存在から、限られた情報からでも文脈・意図・未来を推定する存在へと変化しつつある

現在までのアップデート

- マルチモーダル化により、多様な情報を統合理解
- コンテキストウィンドウ拡張により、大量情報(1Mトークン)の同時把握が可能
- 一方、文脈外の推定は弱く、意図・感情の理解は限定的

概要

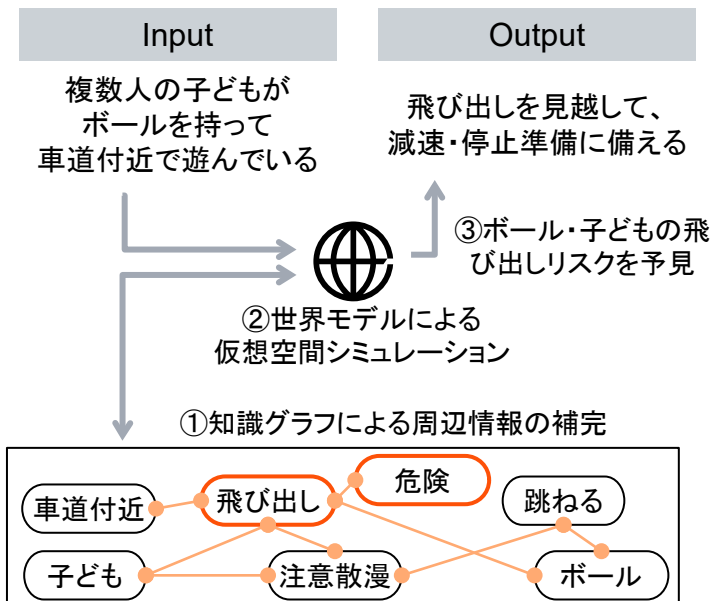
イメージ



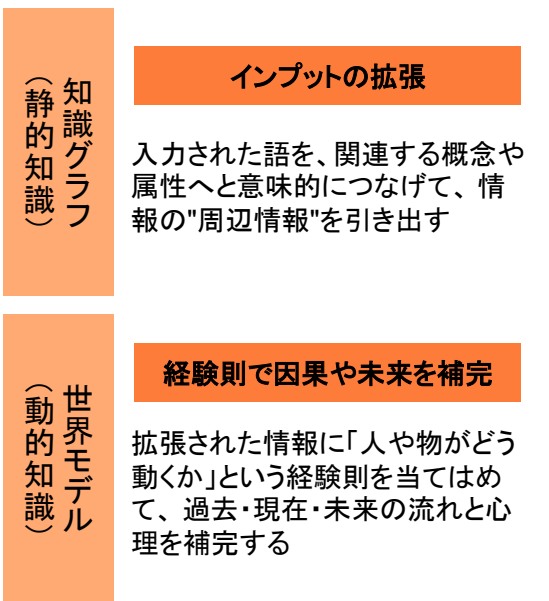
今後期待されるアップデート

- AIは与えられた多くの情報の整理役から、少ない情報を用いて文脈・意図・未来を読み解く存在へ進化
- 世界モデルと知識グラフの連携で、インプットの拡張および経験則による推測の補完を実現

少ない情報から文脈を理解する例(自動運転)



技術発展のポイント



(補足2)記憶力の進化

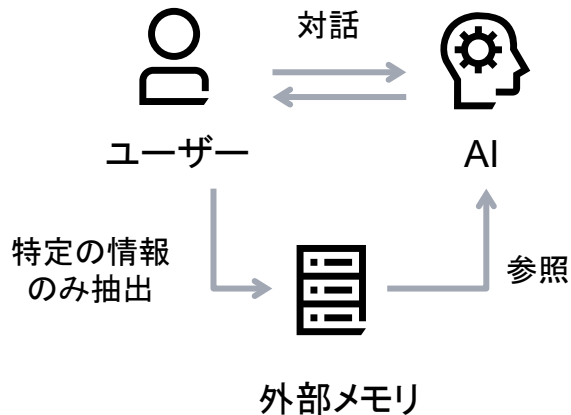
ユーザーと完全に同一のコンテキスト(記憶、五感、感情を含む)を共有できるまでAIの記憶力が進化し、「ユーザーのあらゆる活動を代替可能なAI」の実現が期待される

現在までのアップデート

概要

- AIの「文脈(コンテキスト)」を外部メモリとして保存する機能が発展

メモリ機能の発展



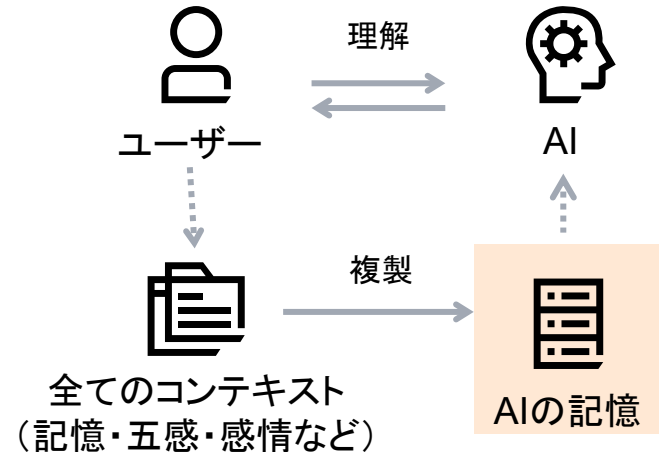
イメージ

外部メモリにユーザーが持つコンテキストの一部が保存される

今後期待されるアップデート

- ユーザーと完全に同一のコンテキスト(記憶、五感、感情など)を共有が可能
- それに伴い、外部メモリの情報量が増加するため、情報の重要度合いに応じたメモリの多層化が進む

全てのコンテキストの共有



ユーザーが持つコンテキストの全てがAIと共有可能になり、あらゆるユーザーの活動を代替できる

階層化された記憶

- ユーザーにとって価値の高い情報が上位レイヤーに移動
- 各コンテキストの関連性を把握

情報量が増加するため、全ての情報をフラットに保存するのではなく、重要度を自律的に判断し、それに応じてメモリを多層化する

(補足3)創造力の進化

直近1年でAIエージェントの課題解決能力は、長期間停滞していた課題を自律的に解決する段階へと進化中。今後のAIの創造力は、デジタル上の知的探索にとどまらず、科学的発見やフィジカル世界での実行を含むより高次の課題解決能力として発展

現在までのアップデート

概要

- AIエージェントの推論能力・自律性向上により長期間停滞していた課題がAIにより解決される事例の報告が相次ぐ

今後期待されるアップデート

- 今後のAI創造力は、①推論能力の深化と②センサー・ロボット・実験装置等を通じたフィジカル世界へ拡大する方向に進化
- 両者の交差領域であるAI for Science(自律的な研究開発)では、仮説生成から実験・検証までのサイクルが高速化し、新たな科学的発見が加速

AIエージェントの創造力の進化

イメージ

要因①: 推論能力の向上

数学／プログラミングなど多くの分野で人間以上の推論能力

要因②: 自律性の向上

ワンストップの実行能力獲得 (≒人間不在で大量・長時間実行)

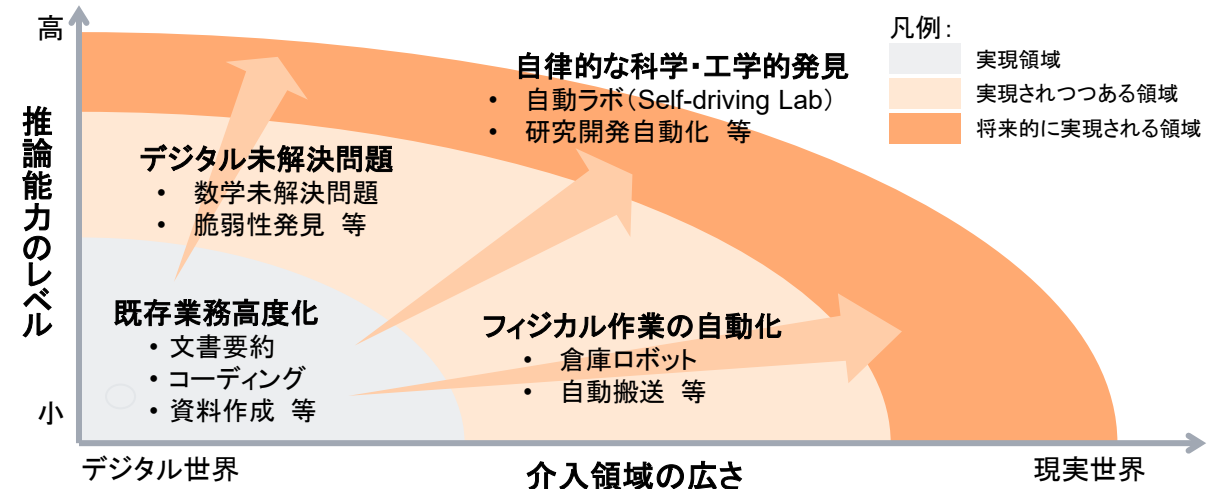
事例①: AIエージェントによるソフトウェアの重大脆弱性発見

トップエンジニア達が長年見過ごした有名OS・ライブラリの重大欠陥をAgentが自律的に発見 (2026年4月)

事例②: 数学の未解決問題解決事例

エルデシュ問題*の一つがAIにより解決に至った事例が報告 (2026年1月)

AIエージェントの創造力拡張イメージ



*: 20世紀の数学者ポール・エルデシュが提起した膨大な未解決問題の総称

(補足4)生産力の進化

生成AIそのものの進化に加え、長時間タスクを自律遂行させるハーネス(実行基盤)の進化によりAIの生産力は加速。
自律性がバーチャル環境にとどまらずフィジカル世界の生産プロセスへ拡張されるかが今後の焦点

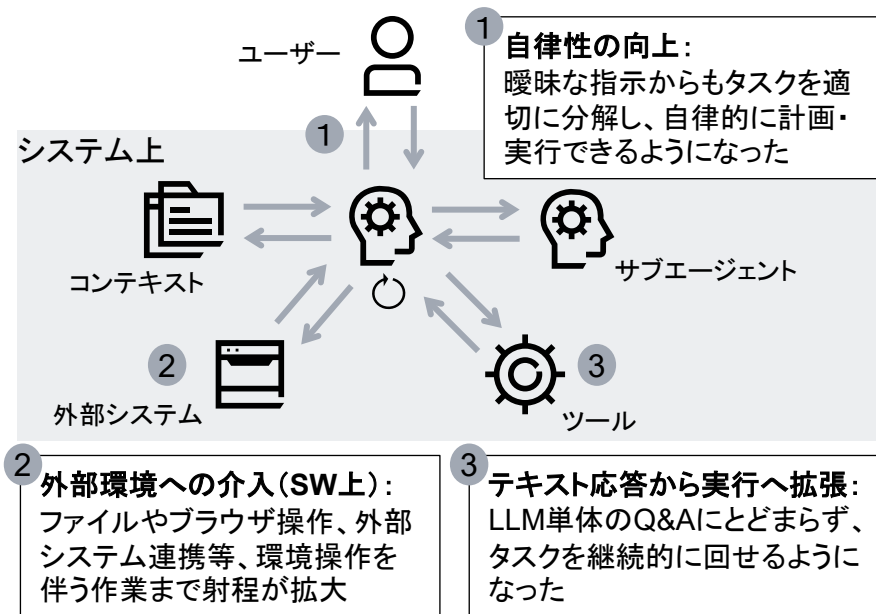
現在までのアップデート

概要

デジタル環境での自律実行:

- ハーネス*の高度化により外部環境の操作を伴う実行能力が拡張され、長時間タスクを自律的に遂行して成果物を生産できるように進化

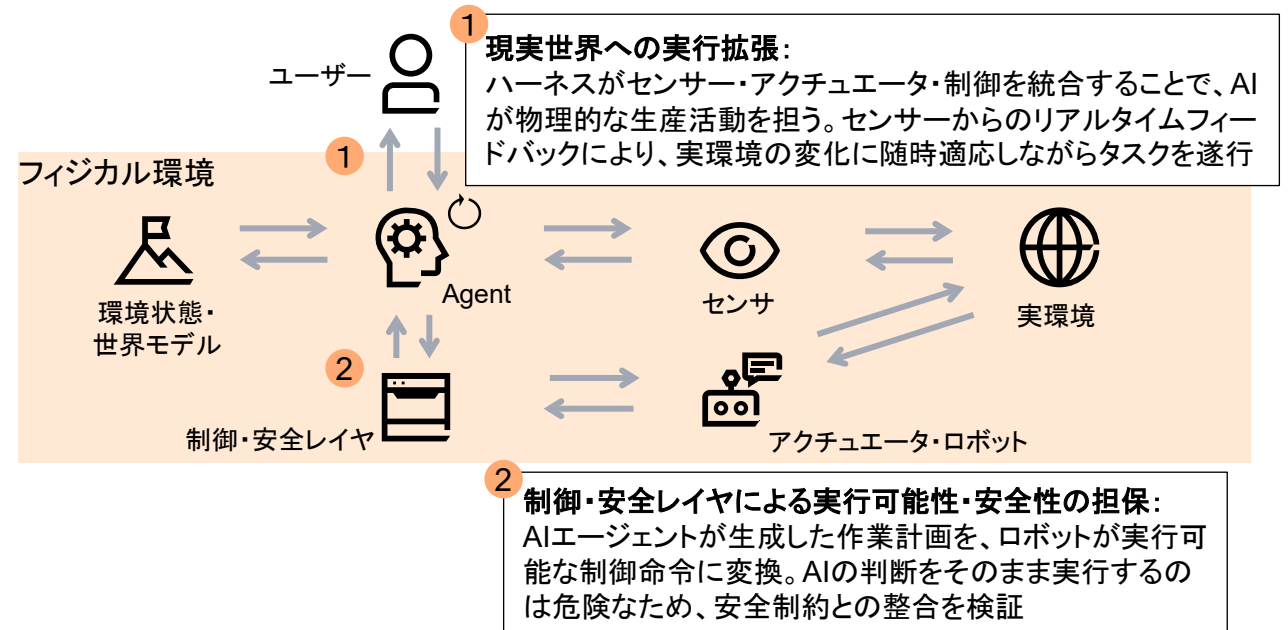
イメージ



今後期待されるアップデート

フィジカル環境での閉ループ実行:

- マルチモーダルAIとPhysical AIの発展により、AIの自律実行はバーチャル環境を超え、現実世界の生産プロセスへ拡張
- 物理世界ではAIの誤判断が設備破損や安全事故につながるため、AIの判断を安全に実行可能な制御命令へ変換する仕組みが実装上の焦点



*: Harness(馬具)を語源に持ち、ツール実行・状態管理・記憶保持を行いながら長時間にわたりAIを自律的に動かすための実行基盤

(補足5) 協調力の進化

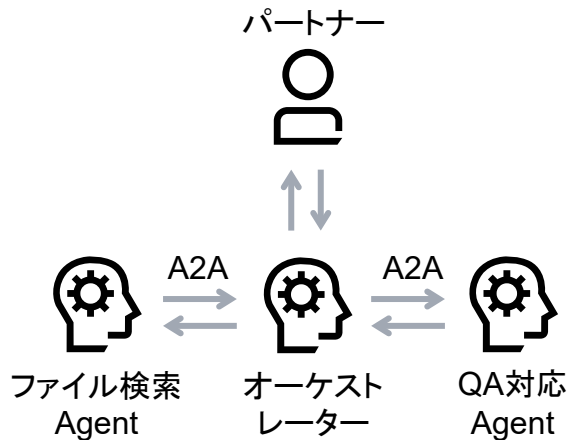
現在、A2Aやオーケストレーション技術の進歩でAIエージェント間および人との協調力が強化されている。今後はAIエージェントが自律的に役割を発見・分担し、多数のAIエージェントが協働する様子を人が監督する形へと進化していく

現在までのアップデート

概要

- A2A等のプロトコルの進展やオーケストレーション技術の発展により、Agent間およびAgentと人間の協調力が強化

人間伴走型

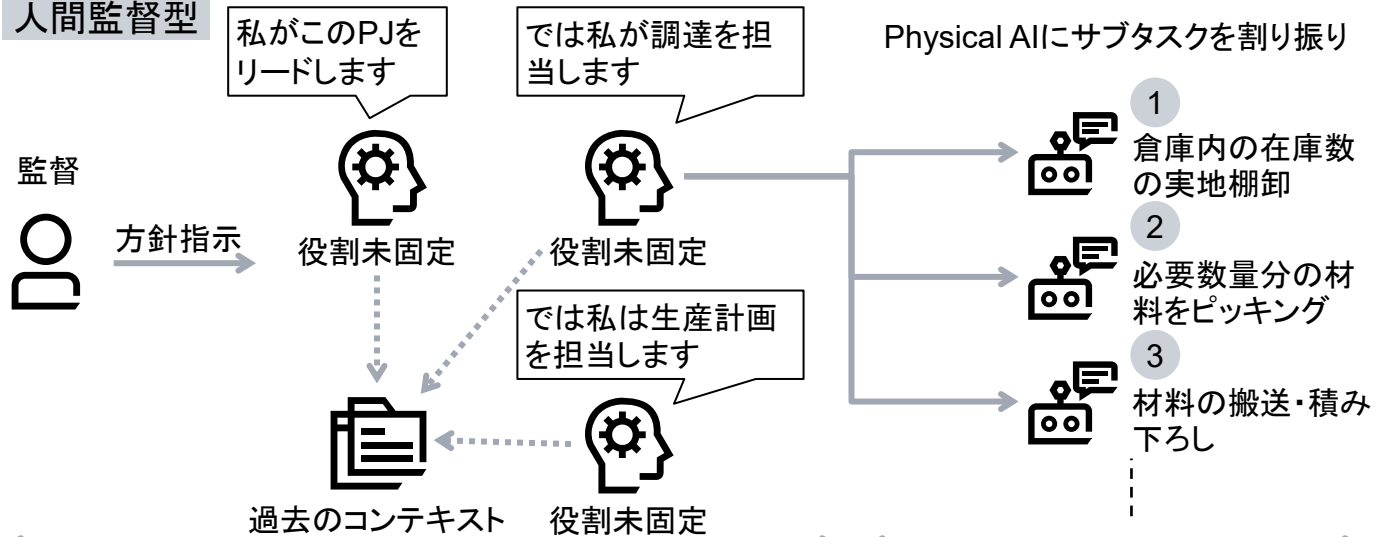


AI同士が協調することで人間の指示の基タスクを遂行していく伴走型のマルチエージェントが発展

今後期待されるアップデート(仮説)

- Agentが過去のコンテキストから自律的に役割を見出し、タスクを推進していく
- 協調するAgentの数が増加し、Agent同士だけでより難易度の高いタスクを完結できるようになる(自己増殖エージェント)
- その結果、人は複数のAgentを統括する監督の役割へと変化する

人間監督型



各エージェントが過去のコンテキストを参照しながら、自律的に役割を見出しタスクを推進していくことで、人間はAgentを統括する監督の役割へと変化

Physical AIの発達により物理的なタスクの連携も進む

(参考) AI業界の主要人物によるAI予測

基盤モデル開発企業や半導体・計算機器ベンダーなどの複数の観点からも、AIは2035年ごろまでに、人と同等以上の知能を獲得し、自律的に業務を進めるデジタル・フィジカル両面の労働力へと進化していくと考えられる

AGIの到達点

2030年前後に、AIは一部で人を超える知能へ到達する見立てが強い

米国フロンティア
AI企業CEO

2030年までにAIは人間知能を超える。2035年の論点は性能から雇用・分配・制度設計に移る

米国フロンティア
AI研究企業
CEO

今後10年で“データセンターの中の天才集団”が成立しうる。コーディングは1~2年で端から端まで自動化に近づく

大手AI
研究組織
CEO

今後5~10年でAGIに到達する可能性がある。2030年代には科学・医療・エネルギー課題の解決役になりうる

AI労働・業務代行の到達点

AIは支援ツールから、自律的に業務を担うデジタル労働力へ進化していく

AIアシスタント
事業CEO

今後5~10年で、AIは自ら目標設定・改善・行動する段階に入りうる。知的労働の多くは委ねられていく

大手デジタル
基盤企業CEO

今後3~5年でAIは検索・開発・創作を大きく変える。2030年代には新しい企業・端末・利用形態を生む可能性がある

企業向け
AIソフト企業
CEO

企業は人間だけでなく“デジタル労働者”を管理するようになり、組織運営そのものが変わる

AI発展の制約

AI競争の主戦場はモデル性能だけでなく、演算基盤・供給網・物理世界への業務へ広がる

AI計算基盤
企業CEO

2036年ごろには、人間1人あたり100のAIエージェントが並走しうる。勝負は電力・半導体・設備に移る

先端半導体
企業CEO

AIの普及速度は、半導体・計算基盤・電力効率に左右される。2030年代の競争は、性能以上に“回せるインフラ”で決まる

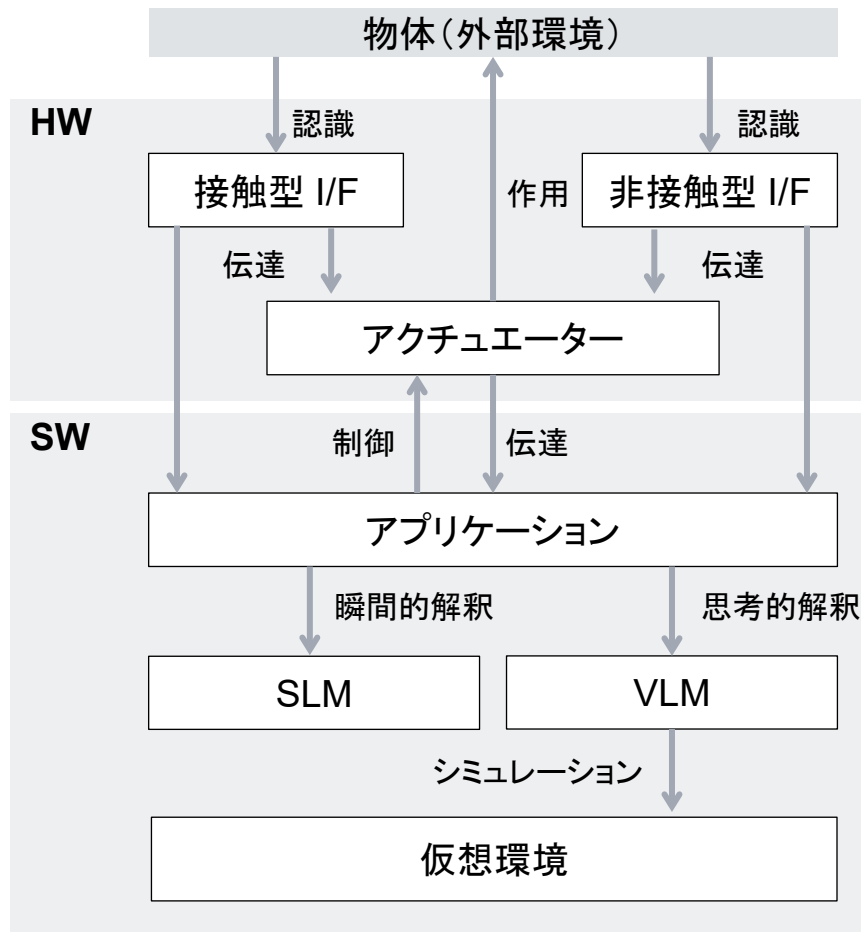
AI・ロボティクス
企業オーナー
CEO

AIが人間を超える日は近く、2030年には全人類を上回る可能性もある。2035年の本命はロボットを含む物理世界だ

(参考) Physical AIの現状における課題

各技術要素のアップデートは進展する一方、HW・SW双方に技術課題が残り、人間が実施する精密作業の完全代替には中長期的にも至らない見込み

Physical AIにおける重要な技術要素



将来的なアップデートの方向性仮説および課題

技術要素	課題	今後のアップデート(仮説)
接触型 I/F	触覚センサーの研究は進んでいるが、高品質センサーは指先など限定箇所のみ	全身を覆うe-skinの実用化により広範囲の接触認識が可能になるが、指先のような繊細さと複合的な感覚の再現は依然難しく、人間並みの精密作業には課題がある
非接触型 I/F	暗闇等の悪条件下で認識精度が悪化し、実世界において安定稼働できない。	4Dイメージングレーダーの発展やI/Fのマルチモーダル化が進むことであらゆる環境条件で安定した稼働を実現
アクチュエーター	従来モーターでは応答遅延・剛性過多により、人間並みの瞬時かつ繊細な力制御が困難	減速機なしの次世代モーターや人工筋肉で迅速で柔軟な力制御が可能だが、力の強さと繊細さの両立や多自由度制御は依然難しく、人間並みの精密作業には課題がある
アプリケーション	各ロボット毎に対応するアプリが異なり運用が複雑	複数ロボットの横断的制御・監視を可能にするプラットフォームの確立
SLM	リアルタイム制御に必要な推論速度と判断精度のトレードオフが解消されていない	エッジ推論最適化やモデル蒸留により迅速な判断が可能になるが、想定外の状況や微妙な状況変化への柔軟な判断は依然難しく、人間並みの精密作業には課題がある
VLM	長期タスクの計画精度と、行動失敗時における自律的な再計画・リカバリー能力が不足	世界モデルとの連携により仮想空間内で行動を事前シミュレーションし、計画の最適化と失敗の予測・回避が可能に
仮想環境	実現象に則した高品質な生成データは限られる(Sim2Realギャップ)	世界モデルの進化により、物理法則に整合した合成データの大規模生成が可能になり、実データ収集の壁を突破

目次

はじめに

#1 LLMによる人の能力の拡張性

#2 AI エージェントを活用した個人による飛躍的生産性向上の時代へ

#3 個人能力の最大化による次世代組織への転換・再設計

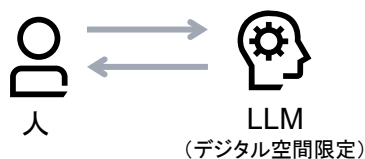
AIエージェントの進化による個人の生産性向上とは

AIエージェントは人の補助を行う従来型の役割から、人の脳や手の外部拡張としての役割へ進化し、個人の生産性は飛躍的に向上する

これまで

人間中心の単体作業

主に人が中心、AIを補助的に活用しながらタスクを逐次処理



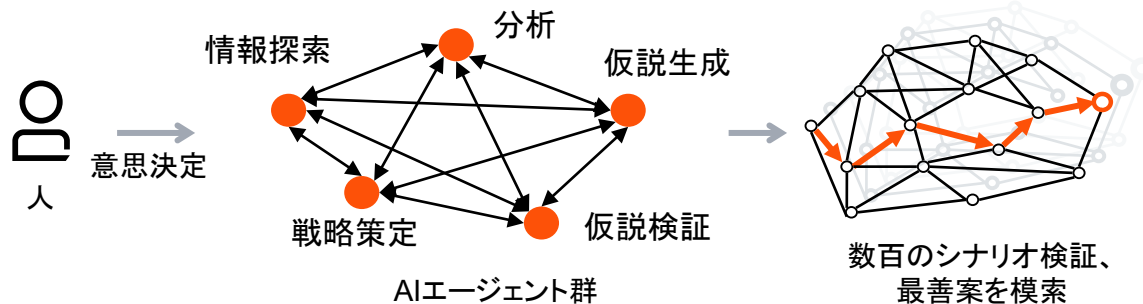
- 特徴
- プロンプトによる逐次指示
 - 単一タスクの支援
 - 思考・判断・実行の主体は人間

- 生産性上限
- AI活用は限定的な並列化にとどまる
 - 生産性の上限は「人間の思考時間・作業時間」に依存

AIによる生産性拡張のメカニズム

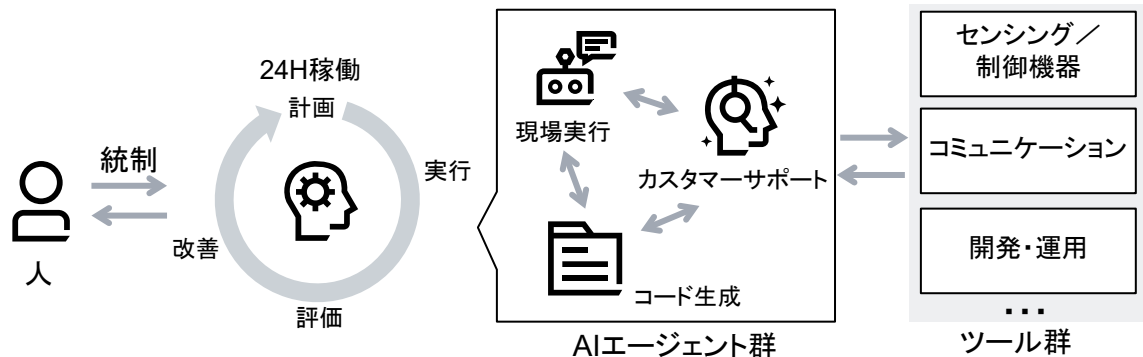
脳の外部拡張 (Cognitive Extension)

AIエージェント群が思考プロセスを外部化・分離し、人間は意思決定に集中する



手の外部拡張 (Execution Extension)

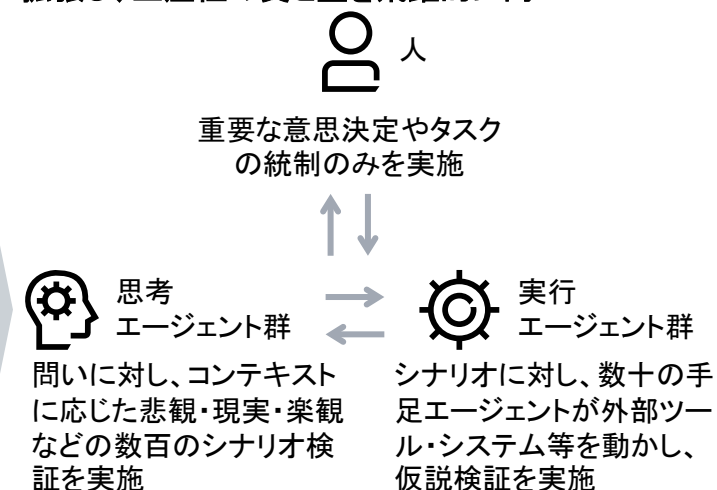
AIエージェントがデジタル・フィジカル両空間に作用し、人間の指示なしにタスクを自律推進



今後

エージェント共進化 (脳×手) 型

複数のAIエージェントの協働により脳と手を同時に拡張し、生産性の質と量を飛躍的に向上



2026年時点：個人の生産性 3倍※

2035年：個人の生産性 10倍以上※

※他社ヒアリングや「AIの並行作業」「24時間自動処理」「やり直し削減」の施策効果を加えた試算

Pre-AGIにおけるAIエージェントによるタスク代替可能領域と構造的制約

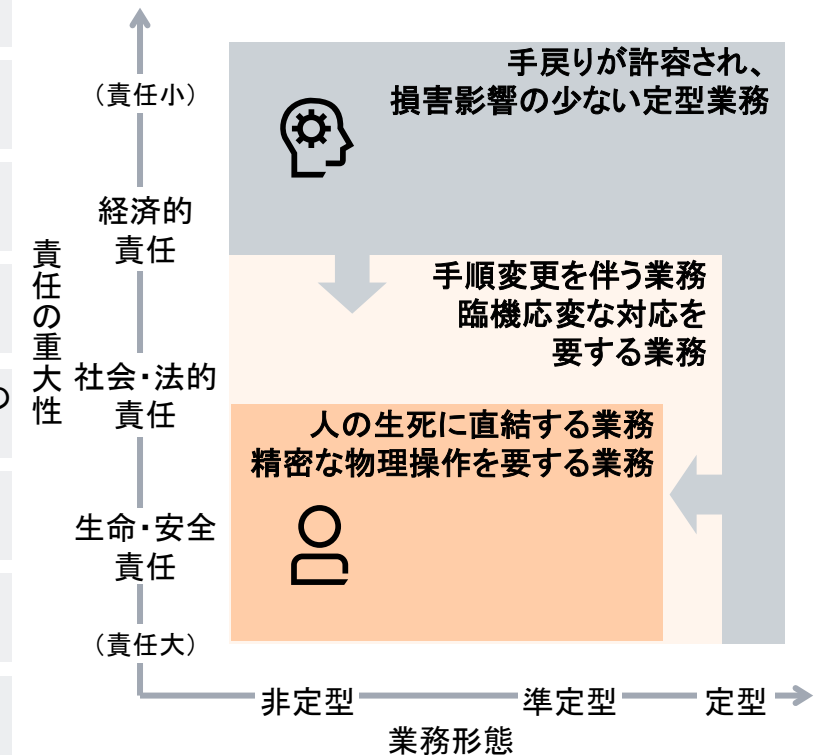
AIエージェントによる代替は定型・標準化業務を中心に広がる一方、人の生死に関わる責任ある判断や精密な作業を伴う領域は構造的制約により人に残り、両者の役割分担がより明確に進む

AIエージェントによるタスクの実行可否

業務カテゴリ		AIエージェントにより自律遂行可能	AIエージェントには困難・高リスク
脳の外拡張の対象領域	情報収集	Web検索、公開データの収集・整理、テキスト・画像・音声情報の認識・分類	非公開情報へのアクセス、現場での一次情報の収集
	分析・構造化	データ分析・パターン抽出、定型的な示唆出し、予測モデルの構築・実行	分析結果に対する価値判断、経営文脈を踏まえた示唆の優先付け
	仮説・設計	叩き台・プロトタイプ的设计、選択肢の列挙と比較、短期の仮説検証設計	不確実性の高い戦略設計、前例のない課題の定義
	意思決定	判断材料の整理、定量評価、複数シナリオの提示	最終承認、高い判断責任を伴う意思決定
手の外拡張の対象領域	クリエイション (設計・開発・制作)	コーディング、コンテンツ生成、Web制作、試作版開発	最終成果物の品質責任、フィジカル空間の現象を伴う実証
	オペレーション (入力・転記・連携)	システム間データ転記、転記・請求処理、API経由のシステム連携	例外処理やルールが競合するケースの判断
	コミュニケーション	情報伝達中心のメール・チャット対応、定型的な顧客対応	エスカレーション対応、信頼構築、感情的配慮を伴うコミュニケーション
	フィジカル実行	現場情報を踏まえながら行う、定型的な搬送・検品・組立	瞬時の判断が求められる現場での作業、繊細な力加減・再判断を伴う対応

構造的制約により人に残る業務領域

構造的制約を伴うタスクはAIエージェントの実行範囲の外側に残る



今後、個人がAIエージェントを駆使し、会社を動かせる時代へ

AIエージェントを自動・並列・自律的に活用することで、One Person, One Billion Company¹が実現可能。人手依存や中間工程への常時介在を取り払い、人の関与を戦略、重要接点、例外対応に絞ることで大きな生産性レバレッジが生まれる

One Person, One Billion Companyの実現イメージ

企業価値 1,500億円企業 >> ARR² 150億円 / 総顧客13,000社 (有償顧客数約6,000社) / Freemiumモデル (営業活動なし)

機能・成長ドライバー		月間業務量	Agentタスク	想定Agent数	人のタスク【業務割合、月稼働時間】
プロダクト企画	新規リリース :4回/月	新規機能の検討 :20件/月	顧客ニーズの探索 短期A/Bテストによる 新規機能の仮説検証	3~4体	長期的な顧客ニーズの探索:4回/月 プロダクト方向性の戦略策定:4回/月 【15%、24h/月】
プロダクト開発		既存機能保守開発 :200~300件/月 新規機能追加 :5機能	機能保守の並列処理 新機能設計~開発~テストの自律化・並列化	8~12体	仕様・要件の整合確認:4回/月 付加価値・優先順位判断:4回/月 【4%、24h/月】
マーケティング (デジタル広告)	新規有償顧客 獲得数 :200社/月	マーケ費 :4,000万/月 (CAC ³ 20万円/社)	30本の「クリエイティブ作成~メディアプラン作成~入稿~改善~報告書作成」の自律化・並列化	8~10体	最低限のブランド・コンプラ確認 :8回/月 【12%、24h/月】
カスタマーサポート	総顧客数 :13,000社	無償・有償顧客問合せ :1,800件/月	対顧客コミュニケーションの自律化	8~10体	有償顧客への非定型対応:50件/月 【10%、50h/月】
バックオフィス	新規契約処理 :200件/月 月次決算レポート :1レポート/月	法務・請求処理 :各200件/月 分析・レポート作成 :1レポート/月	定型処理(請求・契約更新)の自律化・並列化 月次決算レポート作成の自動化	3~4体	非定型処理:40件/月 【14%、20h/月】

1. 1人の創業者がAIなどを駆使してつくる評価額10億米ドル規模の企業
2. ARR: Annual Recurring Revenue (年間経常収益)。
3. CAC: Customer Acquisition Cost (顧客獲得単価)。

AIエージェント: 30~40体 人: 月142時間稼働

生産性増大のKSF

人の介在を
戦略の起点・重要接点・例外処理に限定

AIエージェントは短期の仮説検証を高速に回し、人は中長期の戦略策定に集中する

AIエージェントは保守改修から新機能開発まで並列実行し、人は最終レビューで品質を担保する

AIエージェントは制作・入稿・改善を自律実行し、人はブランド・コンプラの最小限統制を担う

AIエージェントは一次応答・回答生成を担い、人は重要顧客・非定型対応に集中する

AIエージェントは定型・準定型処理を担い、人は例外処理・非定型判断を担う

AIエージェント群で企業を運営する先進事例

AIエージェントが開発・分析などの実行工程を担い、人はレビュー、最終判断、対人現場対応など責任を伴う領域に集中している。AI活用の本質は、人を減らすことではなく、企業運営の役割分担を再設計することにある

事例①: 少人数体制による遠隔医療事業

AIエージェントを事業実行レイヤーに組み込み、人は判断や責任を求められる領域に集中

- ・少人数体制(2人) + 外部専門基盤を備えた医薬品ECサイト運営

AI活用領域

サービス構築から運営実務までの全工程をAIで代替

- ・サービス構築(サイト・広告生成)から日常運営(定型顧客対応・システム連携)、業務改善活動(業績分析)などの事業の実行工程をAIエージェントが代替



人が担う領域

最終責任・規制対応・リピート顧客対応を担当

- ・規制・専門資格・高リスクを伴う領域(処方・調剤・会計・法務)やリピート顧客への特別対応について、外部専門組織を含めた専属スタッフが対応



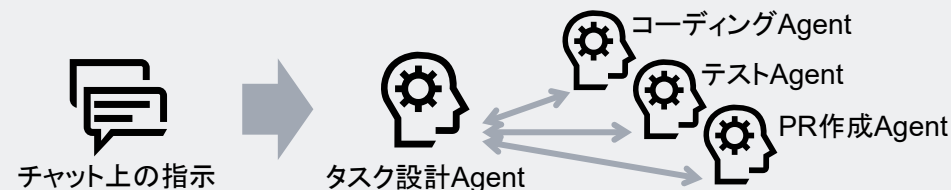
事例②: AIエージェントによるSaaSプラットフォーム運営

AIエージェントを「AIの同僚」として社内に組み込み、人はAIエージェントの管理・品質判断・戦略に集中

- ・従業員数十人体制でAI開発プラットフォームを提供するテック企業
- ・「自然言語でのアプリ作成」ノーコードツールの提供

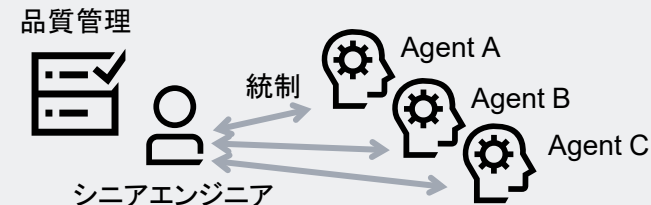
社内業務の実行レイヤーをマルチエージェントで自動化

- ・チャット上の指示から開発(コーディング→テスト→プルリクエスト作成)を自律実行するマルチエージェント構造により、Agentが役割分担



AIエージェントの指揮統括・品質保証・高リスク判断を担当

- ・AIエージェントの成果物に対する品質・安全性の最終判断を、シニアエンジニア1名が統括的に担当

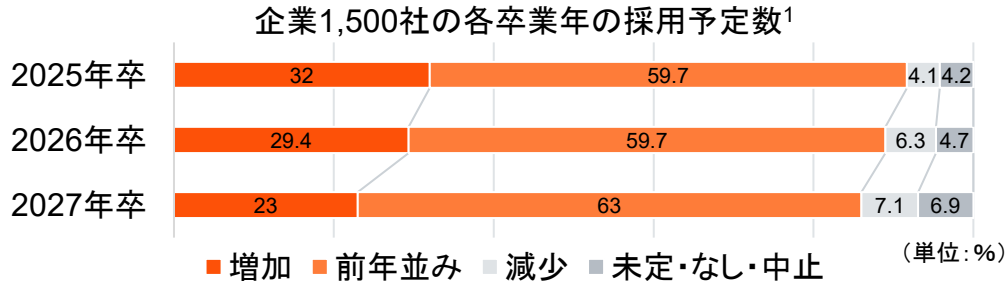


(参考)AI活用による採用市場と求められるスキルの変化

AIスキルが一般化するまでの10年間は採用市場の変化が起こり、AIエージェント群を使いこなすか否かで採用市場における評価が変わる

昨今の採用市場の変化

新卒採用を「増やす」企業は2年連続で減少。大企業の一部ではAI活用による業務効率化を理由に採用数を前年比2~4割削減する動きが顕在化



国内大手企業の採用数の削減幅²

企業カテゴリ	2026年から2027年(計画)の採用数の削減幅	背景・理由
A社	960 → 750 (約2割減)	AI利用拡大と業務効率化
B社	653 → 470 (約3割減)	現場業務縮小と業務効率化
C社	455 → 280 (約4割減)	人員充足とDX推進

1. マイナビ「2027年卒 企業新卒採用予定調査」(https://career-research.mynavi.jp/research/20260225_107886/)を基に作成
2. 各社プレスリリースを基に作成

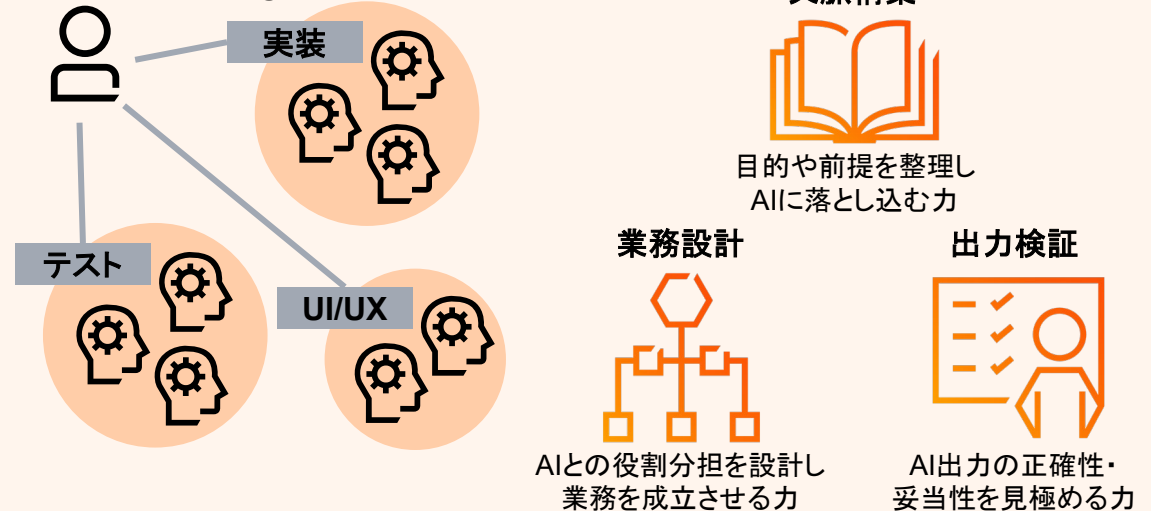
採用市場の縮小局面で評価されるスキル

これからの採用市場では、業務ナレッジを持つAIエージェント群をどう使いこなし、どれだけ高い生産性を実現できるかが評価対象になる

個人がAIエージェント群と協働して発揮する能力で評価

- ①どの業務領域の知識を組み込んだ ②AIエージェント群をどのようにAIエージェント群を構築・活用できているか
使いこなせるか

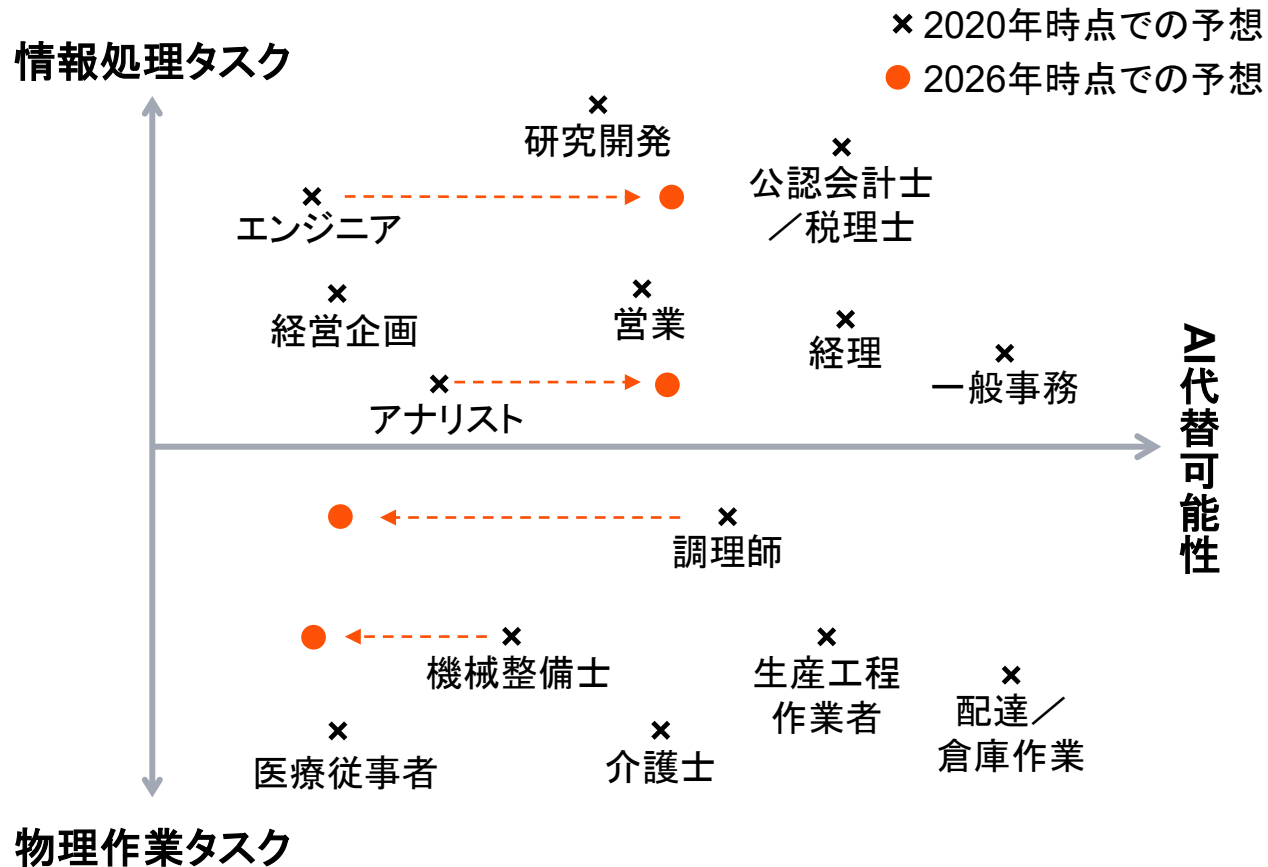
AIとの協働力



(参考)生成AI・AIエージェントによる職種代替可能性の変遷

2020年時点では代替困難と予測されていた情報処理タスクが、AIエージェントの進化により職種代替の対象へと大きくシフトする一方、物理作業タスクはPhysical AIの未発展を理由に代替可能性が下がっている

職種代替可能性の変遷



2020年時点で予測

- マニユアル化しやすい「定型的な情報処理」が中心で、高度な判断が必要な非定型業務は代替困難と予測されていた。

2026年時点での予測の変遷

- AIエージェントの自律性を支える「5つの能力」(認知・記憶・創造・生産・協調)が進化したことで、かつては困難とされた高度な情報処理タスクの自動化が可能となった。
- これによりプログラマー等の高度な「情報処理タスク」の代替予測が急増。一方で、Physical AIの未発展から手作業が必要な精密な「物理作業」の代替可能性は低下している。

目次

はじめに

#1 LLMによる人の能力の拡張性

#2 AI エージェントを活用した個人による飛躍的生産性向上の時代へ

#3 個人能力の最大化による次世代組織への転換・再設計

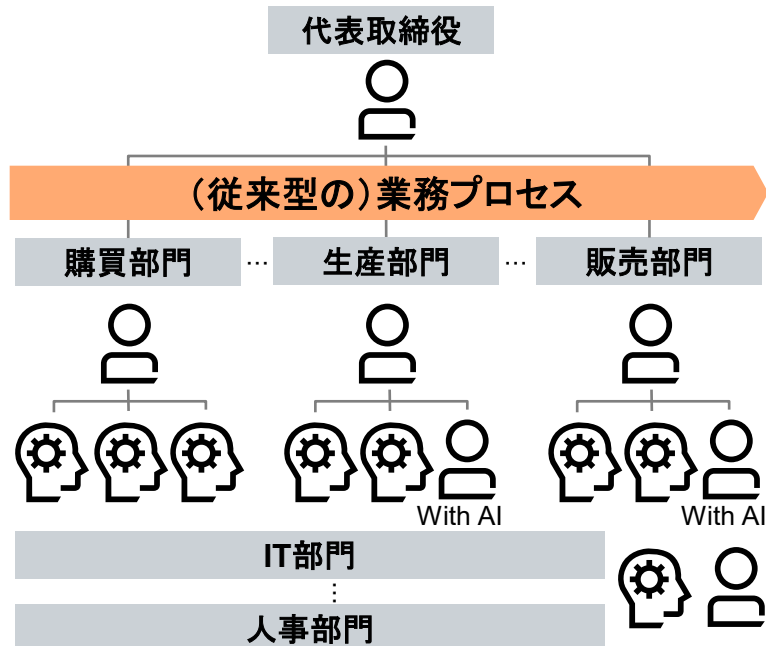
PwCが考えるAIの生産性向上に伴う企業の在り方の変化

シンギュラリティ・エンタープライズ*への転換において、AI活用で圧倒的な生産性を発揮する「オーグメンテッド・ヒューマン」で構成される「オーグメンテッド・エンタープライズ」が、その重要な転換点となる

2025年～2026年ごろ (With AI)

シンビオティック・エンタープライズ*

ピラミッド型組織で、「AIとヒト」が固定された業務フローを実行

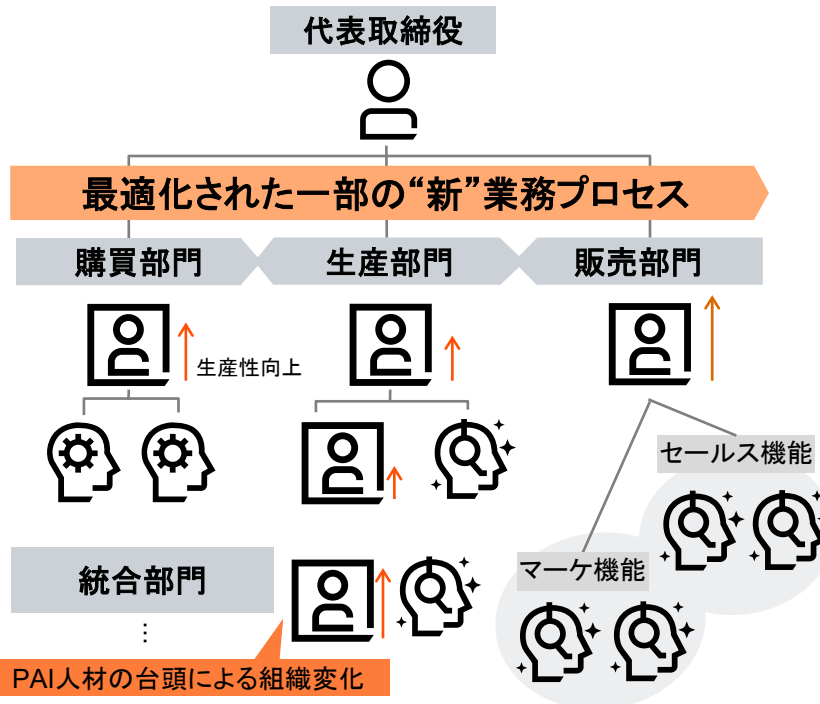


*PwC「生成AIの将来技術動向」(2025年)より

2026年～2035年ごろ (Pre AGI)

オーグメンテッド・エンタープライズ

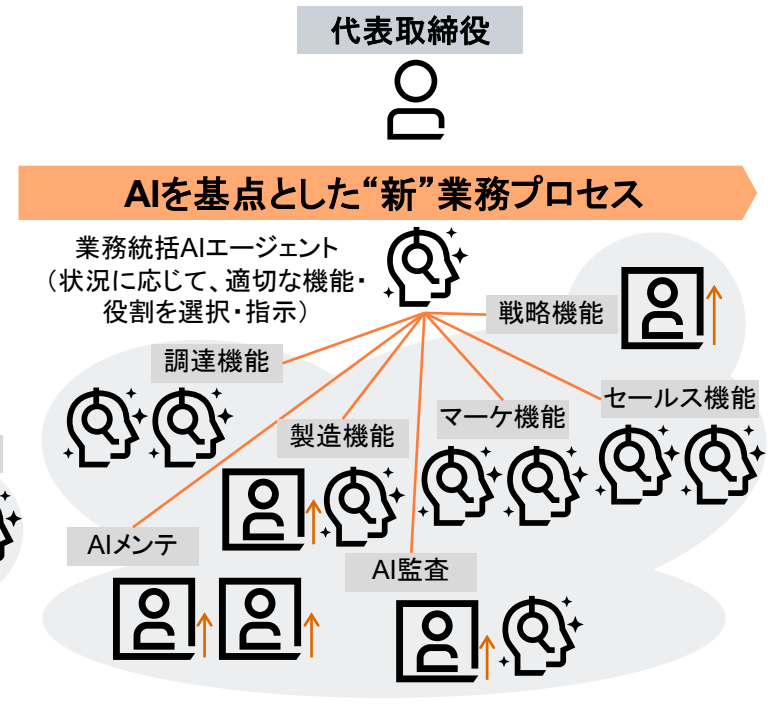
次世代への過渡期組織で、AI活用で圧倒的に生産性を上げる人=Productivity Augmented Individual (PAI)が業務を実行



2035年ごろ～ (After AGI)

シンギュラリティ・エンタープライズ*

ホラクラシー型組織で、「AI」が動的再編される業務フローを実行



個人の生産性向上が及ぼす組織への影響

AIエージェントの進化により、従来は組織で担っていた業務プロセスを個人や少数で遂行可能となる。「分業・調整」を前提とした従来の組織構造は価値が減り、階層・部門・役割といった組織構造の抜本的な再構築が促される

AI進化に伴う人とAIの役割

- AI: 連続タスク(エラー検知→リトライ等のフィードバックループ含む)や定型・準定型業務を自律的に実行する
- 人: 単純作業・事務作業から解放され、AIの監督・例外対応に回る

自動化

- AI: オーケストレータを通じて協働し、同時並行でタスクを遂行する
- 人: 並列稼働するAIの作業結果を統合し、意思決定・評価を行う

並列化

- AI: 型化された手順・判断基準を共通基盤上で再利用し、同一・類似業務を横断実行する
- 人: 型化されたルールの設計に注力し、個別の確認・承認作業から離れる

標準化

業務の変化

- 業務実行に付随する運用工程(進捗管理・報告・監視等)が省略され、業務のリードタイムが大幅に短縮される

- 直列的な業務フローが並列フローへ再設計され、業務のスループットが飛躍的に向上する

- 属人的な手続き・暗黙知依存の工程が排除され、業務アウトプットの品質が均質化・再現性が向上する

組織の変化

組織構造の変化

- 従来全体最適であった組織ピラミッド構造が変化する
- AIが作業し人が監督・判断する構造へと業務プロセスが変化することで、各階層において求められる役割がより高度・創造的なものへ変化する

部門構造の変化

- 一部部門業務がAIによって代替され、部門の役割が縮小・統合される
- AIによって部門間の協働のあり方が変わり、部門の境界が流動的になる

階層構造の変化

- AIが業務を代替することで人同士の調整、一次レビュー、進捗管理等、中間管理層の一部役割が不要になる可能性
- 既存の階層構造が縮小し、境目がなくなる

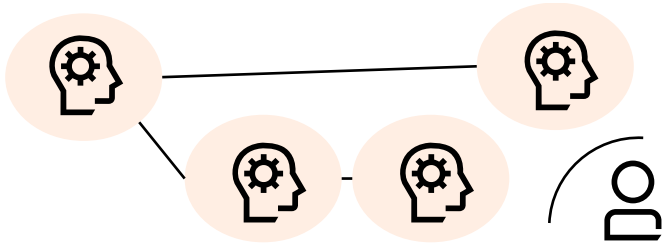
個人の生産性向上に伴う組織構造変化の在り方

従来のピラミッド型の組織構造は多くの場合で崩れつつも、職能の性質や物理環境の制約等により全社最適に向けては段階的な変化をたどり、その過渡期には複数のパターンが併存する

AI活用による組織構造変化パターン

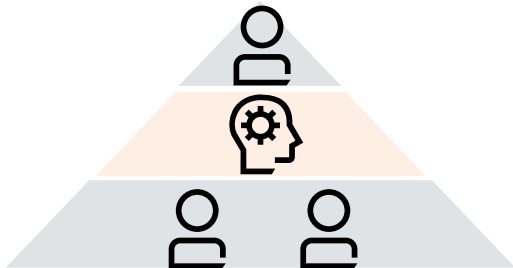
フラット型

階層構造を持たず、人間は目的提示と成果利用のみを担う。意思決定を含む全タスクをAIが自動実行し、状況に応じて動的に組み替わる組織



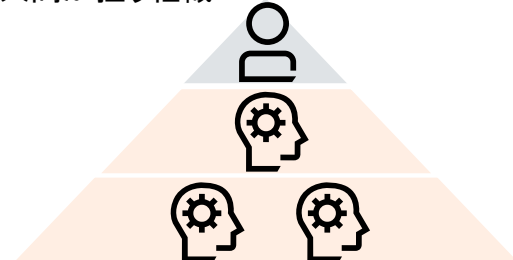
中抜き型

対人関係・精密作業等の環境制約がある現場業務はヒトが担う一方で、中間管理業務はAIが代替し、経営業務と現場業務が直結する組織



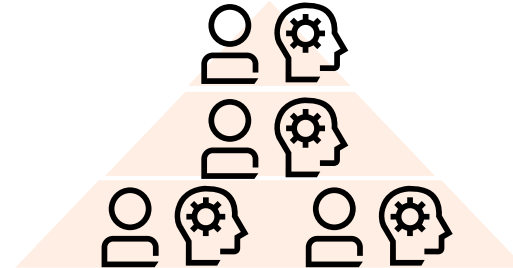
統制型

現場業務・中間管理業務は全てAIが代替可能である一方、意思決定のリスク・責任が大きい判断のみ人間が担う組織

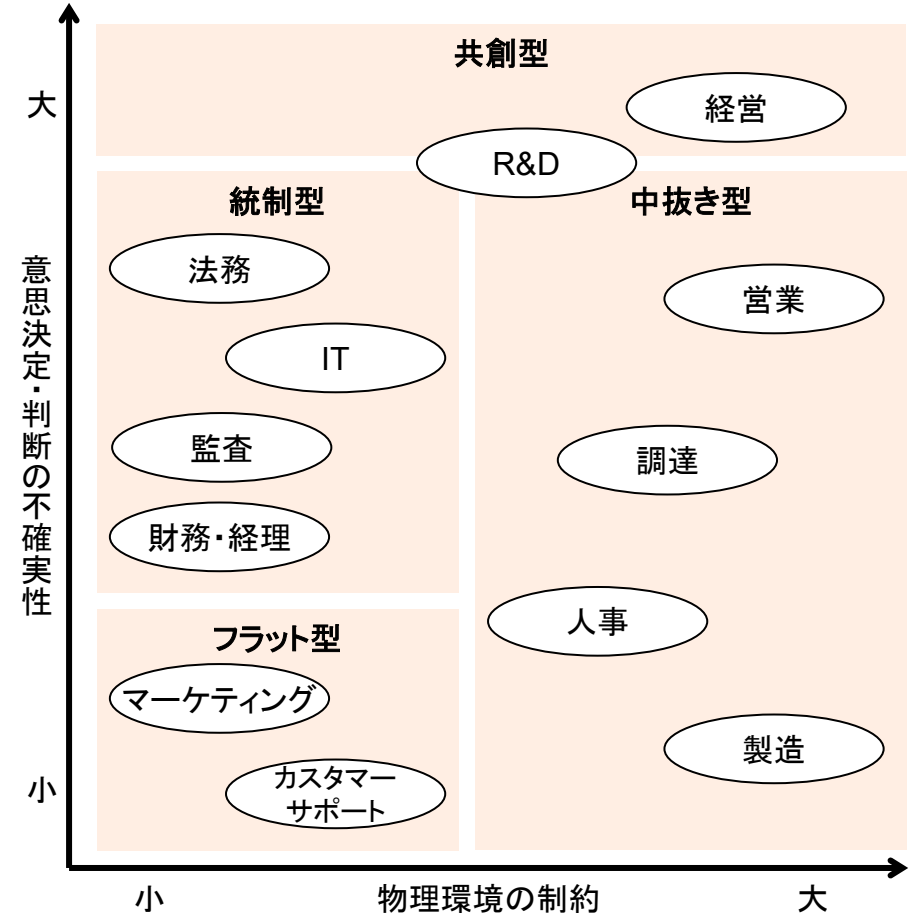


共創型

意思決定判断・創造的業務等の完全自動化が困難な業務が中心となる場合、AIを効率化・生産性向上のパートナーとしてヒトが協働する組織



業務部門ごとの組織構造変化



シンギュラリティ時代におけるリスクガバナンス

AIによる意思決定は「合理性・高速性・高品質」をもたらす一方、その実効性は3線ディフェンスによる重層的なリスクガバナンスによって担保されるため、社外への適切な説明と理解の醸成が不可欠となる

AIによる意思決定の効果

社内政治・忖度・属人性の排除(合理性)

派閥・上下関係・忖度といった社内政治の非合理的な力学が排除される

調整コストの撲滅による即時判断(高速性)

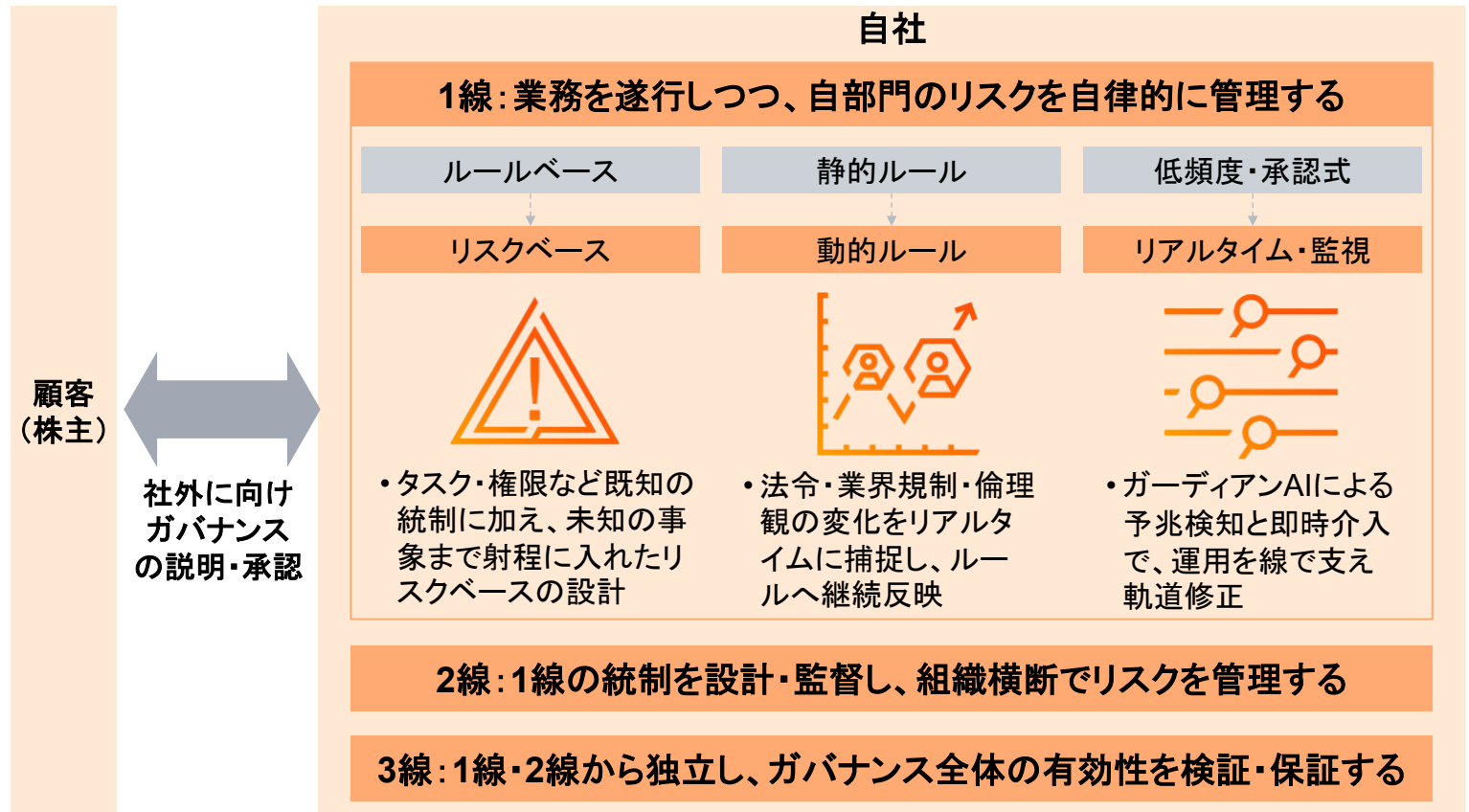
根回しや稟議といった調整コストが消え、判断がリアルタイムで下される

シミュレーションによる最適判断(高品質)

人間の認知限界を超えたシミュレーションにより、ブレのない一貫した最適解が導かれる

AIによる意思決定の最大化のために

リスクガバナンスの考え方



組織構造変化の先進事例

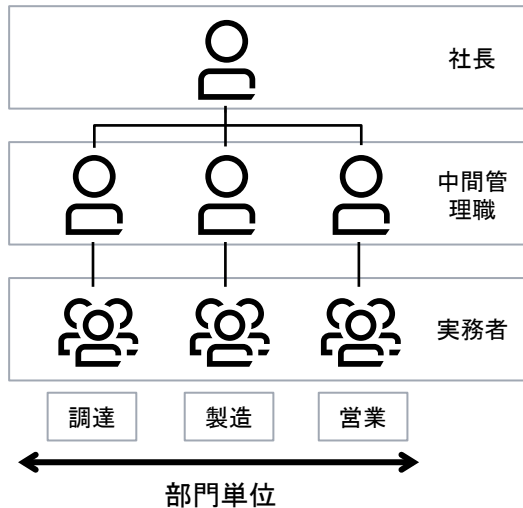
AI・デジタル技術の進化を背景に、先進企業では中間管理職の削減や人事部門とIT部門の統合など、組織構造の根本的な変革が始まっている

中間管理職を削減

- AI・デジタル技術が急速に進化する環境で、組織内の不必要な承認手続きを減らし、実務者中心に迅速に意思決定するため、管理職を半分削減
- AIとともに働くために、T字型人材(特定分野の深い専門性に加えて、広い視野と多様な領域の理解力を備えた人材)の育成を目指す

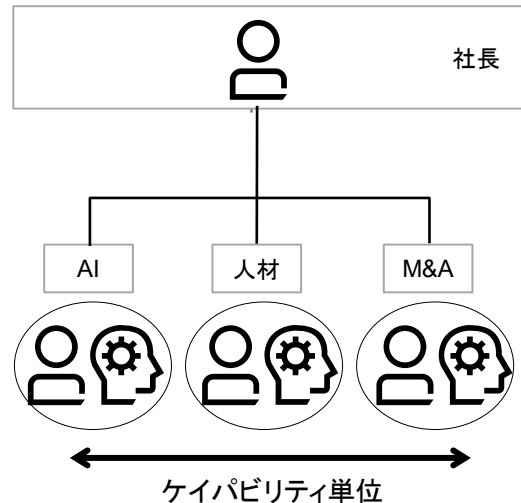
管理職中心×部署

責任・品質担保・育成の観点から管理職は必要だが、不要な承認や部門間調整が多く、スピードが遅くスケールしにくい



実務者中心×ケイパ

AIが品質を担保することで、実務者がケイパビリティを軸にプロジェクト単位で機動的に動き、スピード・スケールが向上

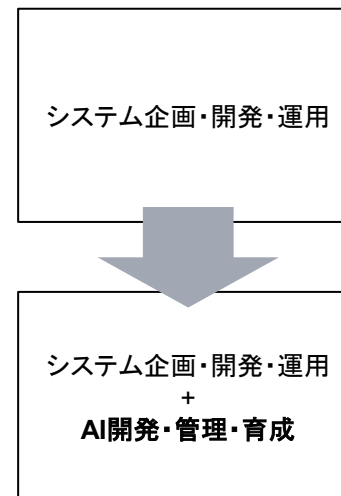


人事部(HR)と技術部門(IT)を統合

- 人とAIのどちらがどのタスクを担うかを再設計するため、HR部門とIT(デジタルテクノロジー)部門を統合
- 人とAIの適用範囲を明確化することで、AI比率の拡大を目指す

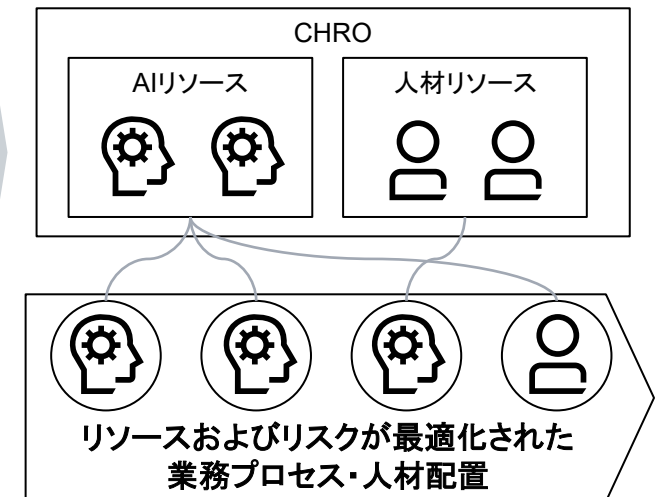
IT部の役割の変化

IT部門が単なるシステム提供者から"AIを戦力として育てる"育成主体へと進化



AIセントリックなリソース配置

AIが担うべき業務はAIへ、人が強みを発揮すべき業務は人へと柔軟に配分することで、リソースとリスクが最適化された業務プロセス・人材配置を実現



日本の構造的優位性とAIによる産業の变革

日本は、企業・社会構造の両面でAI活用との親和性が極めて高い、稀有な国である。この構造的優位性を活かし、どの方向性にブーストをかけるかが、「失われた30年」を「創る30年」へ転換し、企業の優位性を築く鍵となる

AI活用の効果と日本の構造的優位性

日本の構造的優位性	圧倒的な生産性向上
	<ul style="list-style-type: none"> AIエージェントの技術発展により、個人の生産性はAI非活用時と比較し、2026年時点で3倍以上であり今後も増加見込み 今後は、過渡期の組織で、AI活用で圧倒的に生産性を上げる人＝“Productivity Augmented Individual (PAI)”が登場する
	労働者不足の社会
	<ul style="list-style-type: none"> 少子高齢化による労働力不足が見込まれる日本では、AI導入が「効率化」ではなく「事業継続の生命線」となっており、他国より圧倒的に強い導入インセンティブが働く
	高水準で均質な人材基盤
	<ul style="list-style-type: none"> 欧米ではスペシャリスト業務のAI代替が進む一方、日本は配置転換を重ねたジェネラリスト人材が豊富。幅広い業務知見と判断力を活かし、複数領域を横断するAIエージェントの管理・判断役として最適な人材が揃っている
	ジャパンプオリティの追求
	<ul style="list-style-type: none"> 日本人特有の真面目さ・緻密さ・責任感の強さにより、AIに任せきりにせず、最終判断やガバナンスを丁寧に効かせる文化が根付いている。攻めの活用と守りの設計を両立させ、品質と信頼性の高いAI運用を実現できる素地がある

AI活用による日本企業の变革シナリオ



シンギュラリティ・エンタープライズの世界観

顧客ニーズに応える必要性、AIエコシステムの確立という競争圧力、技術・制度・インフラの成熟が相互に作用し、シンギュラリティ・エンタープライズへの移行は必然的に進行する

顧客ニーズの多様化・即時化

顧客自身がAIエージェントに購買・契約を委任し、要求が1人1人マイクロセグメント化・24時間365日即時化するため、受け手側もAI化し業務全体をAI駆動にしなければ対応できなくなる

技術・制度・インフラの成熟

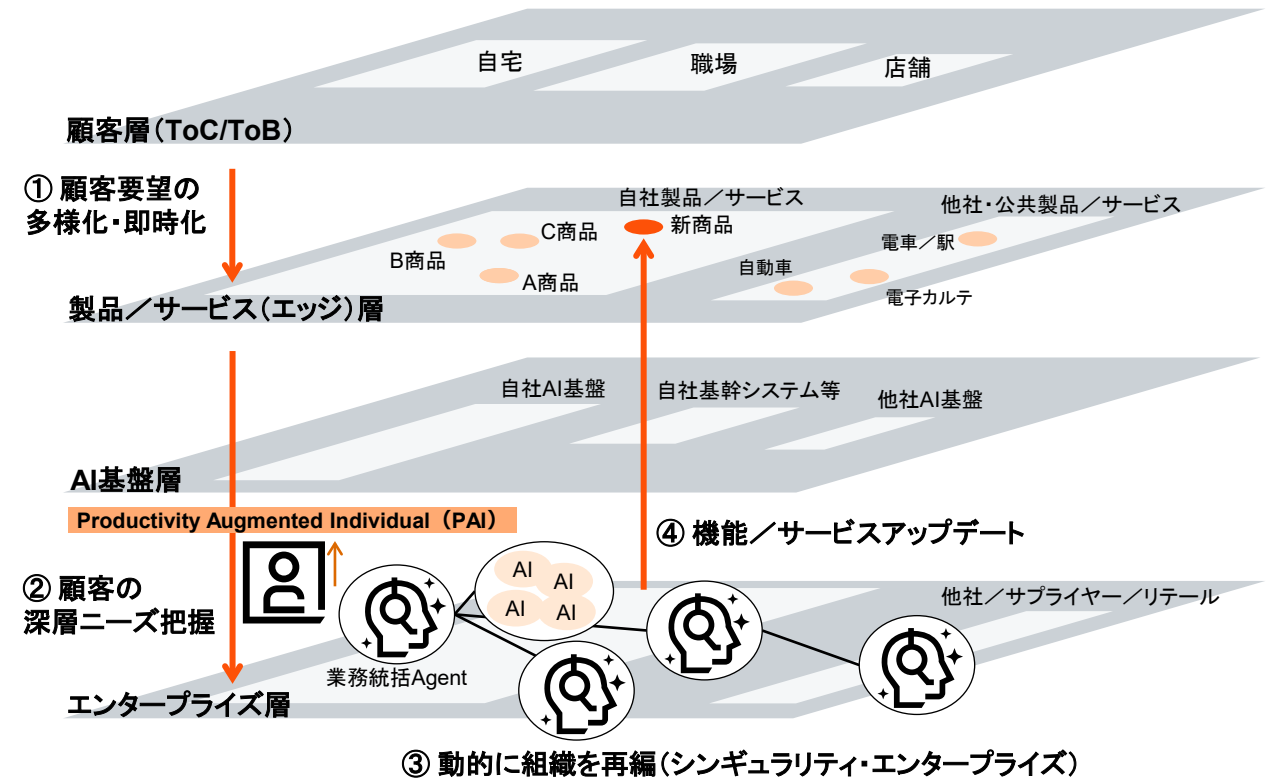
基盤モデルとAgent連携技術の進化、AIの意思決定・契約を認める法制度の整備、推論を支えるエネルギー・計算資源の供給が揃い、実装が技術的・法的・経済的に可能となる

エコシステムのAI連携の確立

サプライヤー・取引先がAIエージェント化し、Agent同士で発注・交渉・契約を自律的に行うエコシステムが成立することで、AI連携できない企業は商流から排除される

シンギュラリティ・エンタープライズの世界観

顧客の深層ニーズを起点に、エコシステム全体のAIエージェントが自律的に連携し、価値提供そのものが動的に進化し続ける経済圏



お問合せ先

PwC Japanグループ

<https://www.pwc.com/jp/ja/contact.html>



PwC Japanグループは、日本におけるPwCグローバルネットワークのメンバーファームおよびそれらの関連会社（PwC Japan有限責任監査法人、PwCコンサルティング合同会社、PwCアドバイザリー合同会社、PwC税理士法人、PwC弁護士法人を含む）の総称です。各法人は独立した別法人として事業を行っています。複雑化・多様化する企業の経営課題に対し、PwC Japanグループでは、監査およびブローダーアシュアランスサービス、コンサルティング、ディールアドバイザリー、税務、そして法務における卓越した専門性を結集し、それらを有機的に協働させる体制を整えています。また、公認会計士、税理士、弁護士、その他専門スタッフ約13,500人を擁するプロフェッショナル・サービス・ネットワークとして、クライアントニーズにのり的確に対応したサービスの提供に努めています。PwCは、クライアントが複雑性を競争優位性へと転換できるよう、信頼の構築と変革を支援します。私たちは、テクノロジーを駆使し、人材を重視したネットワークとして、世界137の国と地域に364,000人以上のスタッフを擁しています。監査・保証、税務・法務、アドバイザリーサービスなど、多岐にわたる分野で、クライアントが変革の推進力を生み出し、加速し、維持できるよう支援します。

発刊年月：2026年6月

管理番号：I202605-03

© 2026 PwC. All rights reserved.

PwC refers to the PwC network member firms and/or their specified subsidiaries in Japan, and may sometimes refer to the PwC network. Each of such firms and subsidiaries is a separate legal entity. Please see www.pwc.com/structure for further details.

This content is for general information purposes only, and should not be used as a substitute for consultation with professional advisors.